

富永神社祭礼奉納

とき 平成七年十月六日(金)
午後四時始
ところ 富永神社 能楽殿

能組

仕舞 紅葉狩
老月宮殿
平野阿裕美
林由加里
西城里香

狂言 口真似
太郎冠者 荒井裕子

主 井出村依里
客 伊藤由佳

狂言 太刀奪
太郎冠者 水野真広

主 山本誠也
通行人 西田猛利
後見 松井平

仕舞 敦衣盛
花羽衣盛
岩崎葉子
鳥居久仁子
本田洋子

半能

シテ 今泉英三

ワキ 竹内省吾
間 畑中良雄
後見 太田康弘

大鼓 清水利高
小鼓 森田收
笛 竹市学

鈴木崇史 高林呻二
竹内三郎 高林白牛二
田中洋二 永田六兵衛
中嶋康夫

狂言 樋の酒
太郎冠者 山口俊一
次郎冠者 加藤賢一

後見 佐藤友彦

主 小林常男
水谷至男
佐野元之助
佐藤融
中山伸一

6:10頃

5:00頃

4:25頃

4:10頃

6:30頃

休憩 三〇分

7:00頃

狂言 萩大名

大名 安形忠久
太郎冠者 天野雅夫
茶屋 酒井宏

独調 笠之段

高林白牛口二
永田六兵衛

後見 権田重紘

特別出演

仕舞 高網之段 砂
鈴木肇
太田康弘

7:50頃

狂言 栗焼

太郎冠者 佐藤友彦

主 佐藤融
後見 山本憲吉

8:20頃

能 狸々

シテ 清水利高
ワキ 竹内三郎

後見 鈴木肇

大鼓 河村総一郎 大鼓 中嶋康夫
小鼓 今岡アイ子 笛 今泉英三

地謡
竹内省吾 高林呻二
田中洋二 高林白牛口二
森田收 高林白牛口二
鈴木崇史 太田康弘

(終了予定 九時頃)

主催 本町区

あ ら す じ

狂言 口真似くちまね

知人から酒、肴を貰った主人、程よい相手連れられて来る様にと太郎冠者に言い付けます。ところが連れて来たのは、評判の酒乱の者。一計を案じた主人は太郎冠者に、自分の言うよう、するように真似をせよと言いつけます……

狂言 太刀奪たちうばい

主人が北野へ参詣すると言います。そこで太郎冠者に槍なりとも、大刀なりとも持って供をせよと言いますが槍も、大刀もないので身すがら参詣に行きます。そこへ良い大刀を持った者が通り掛かります。太郎冠者は考えて主人に刀を借りて大刀を奪おうとしますが返って主人から預かった刀を取られてしまします……

能 半部はんぶ

都、紫野雲林院の僧が、九十日にわたる夏の修行も終わり近くなったので、その期間に仏に供えた花々の供養を行います。すると白い花が開いたかのように、どこからともなく一人の女が現れて、花を捧げます。僧が、女に名をたずねると、ただ夕顔の花と答えるだけで、その名を明かしません、更に問いつめると、五条あたりの者とだけいって、活けられた花の陰に消え失せます。(中入)僧が不思議な思いをしていると、丁度、所の者がやって来て、光源氏と夕顔の物語を聞かせ、その女性性は夕顔の亡霊であろうと述べ、五条あたりへ弔いに行くことを勧めます。僧が五条あたりをたずねてみると、荒れ果てた一軒の家に、夕顔の花が咲いています。僧が、夕陽が落ち、月がさし込むこの家の風情を眺め、『源氏物語』の昔を偲んでいると、半部を押し上げて、一人の女性が現れます。女は、源氏と夕顔の花の縁で歌をとりかわし、契りを結んだ楽しい恋の思い出を語り、舞をまいます。しかし、夜明けを告げる鐘と共に僧に別れを告げ、また半部の中へ消えて行った、と思つたが、それは僧の夢の中のことでした。

狂言 樋の酒ひさけ

主人の留守に太郎冠者は米蔵を次郎冠者は酒蔵を預けられた。酒好きの太郎冠者は次郎冠者の預かった酒蔵から樋を架けて酒を飲ませてもらい、その上酒蔵に入って酒盛りののはて……

狂言 萩大名はぎだいみょう

国元に帰る事になった田舎大名が良い庭を持つている知人の所に遊山に訪れるが、丁度萩の花の盛りでその庭の見物に行くと歌を詠まされるからと太郎冠者に教えられた三十一文字を覚えて行くがその首尾は……

狂言 栗 焼

主人の所に来た到来品の四十個の栗を客に出す様に言われた太郎冠者が囲炉で焼き上げたものあまりに旨そうなので一つ残らず食べてしまふ、そして主人への言い訳に知恵をしほります。

能 狸 々

中国のカネキンザンの麓に、高風という大そう親孝行で評判の高い男がいました。彼はある夜不思議な夢を見ました。それは揚子の市に出て酒を売ると、富貴の身になるといふのです。その夢のお告げの通りすると、なるほど次第に金持となりました。ところで、市のたつごと高風の店へ来て酒を飲む者がいます。その男はいくら飲んでも顔色が一向に変らないので、ある日その名を尋ねると、海中に住む狸々だとあかして帰って行きました。そこで高風は、ある月の美しい晩、今度は潯陽の江のほとりに出、酒壺を置き、狸々の出てくるのを待つことにします。(ここまでの経過をワキ高風が一人で語り、能はここから始まります)やがて狸々は、薬の水とも蔞の水とも呼ばれる銘酒の味をしたい、良き友と会う事を樂しみに、波間から浮かび出て、高風と酒をくみかわします。折から空には月も星もくまなく輝き、岸辺の芦の葉は風に吹かれて笛の音をかんで、波の音は鼓の調べのようにひびきます。この天然の音楽にのつて、狸々は舞い出します。そして、高風の素直な心を賞し、汲めども尽きぬ酒壺を与え、消えてゆきます。